



外泊患者に対する転倒予防

山之内香帆[†] 村井敦子 細井夏実 水野優衣
 中島恵子 松田直美* 裕下紗矢佳* 饗場郁子**

IRYO Vol. 69 No. 11 (493-496) 2015

【キーワード】 神経疾患, 転倒, 外泊, 転倒予防対策

◆ はじめに

神経難病患者は、姿勢反射障害・歩行障害・自律神経障害・認知症などのさまざまな特徴があり、一般の高齢者に比べて転倒しやすい。そのため院内で転倒した事例はヒヤリ・ハットを記載し、予防対策を講じている。しかし患者が外出泊した際の転倒については、帰院後医師や看護師に伝えないことが多く、リハビリ中にセラピストに話をして発覚することがあり、実際の状況を把握できていない。そこで院外での転倒状況を把握するために、外出泊時の転倒実態調査を行い、以前から転倒予防に役立っている転倒予防川柳¹⁾による介入を試みたので紹介する。本研究は東名古屋病院（当院）倫理委員会で平成25年7月1日に承認された。

1. 外出泊時における転倒の実態調査

- (1) 対象：当院の神経内科の4病棟に入院中の患者 延べ748名（男性374名 女性374名）
- (2) データ収集期間と方法（図1）
 - ①転倒記入用紙配布期間（介入期間）：平成24年6-8月の3カ月間（外出泊患者延べ72名）

外出泊前にあらかじめ患者・家族に転倒記入用紙を渡し、転倒があった場合は詳細な状況を把握するために、医療従事者が記載する転倒状況調査用紙を用いて調査を実施した。

- ②転倒記入用紙非配布期間（非介入期間）：平成24年9月-平成25年4月の8カ月間（外出泊患者延べ676名）

外出泊前には転倒記入用紙は渡さず、帰院時に転倒の有無について患者・家族に確認を行い、転倒があった場合は介入期間同様に詳細な調査を実施した。

重症度などを明確に揃えたわけではないので厳密な比較は困難であるが、介入期間は3カ月で1名1件の転倒が発生（0.33名/月）し、非介入期間は8カ月で8名50件の転倒が発生（1名/月）した（図2）。調査期間中に受傷は1件の打撲のみだった。

真鍋らは、『患者の中には「自分は大丈夫」「転倒しない」と転倒・転落への認識が低い場合があり患者にいかにか意識付けしていくかが重要』²⁾と述べている。介入期間の転倒が想定外に少なかったのは、転倒記入用紙を外出泊前にあらかじめ渡すことで、患者・家族に転倒についての意識付けをすることができ、外出泊時に転倒に注意して生活を送るきっかけ

国立病院機構東名古屋病院 看護部 *同 リハビリテーション科 **同 神経内科 †看護師
 著者連絡先：山之内香帆 国立病院機構東名古屋病院 南1病棟 看護部 〒465-8620 名古屋市名東区梅森坂5-101
 e-mail : d.7s_k4@i.softbank.jp

（平成27年8月10日受付，平成27年11月13日受理）

The Fall Prevention for the Staying Out Patient

Kaho Yamanouchi, Atsuko Murai, Natsumi Hosoi, Yui Mizuno, Keiko Nakashima, Naomi Matsuda, Sayaka Matsusita* and Ikuko Aiba**, Nursing Department, *Department of Rehabilitation, **Department of Neurology, NHO Higashi Nagoya National Hospital

（Received Aug. 10, 2015, Accepted Nov. 13, 2015）

Key Words : neurological disease, fall, staying out, fall prevention

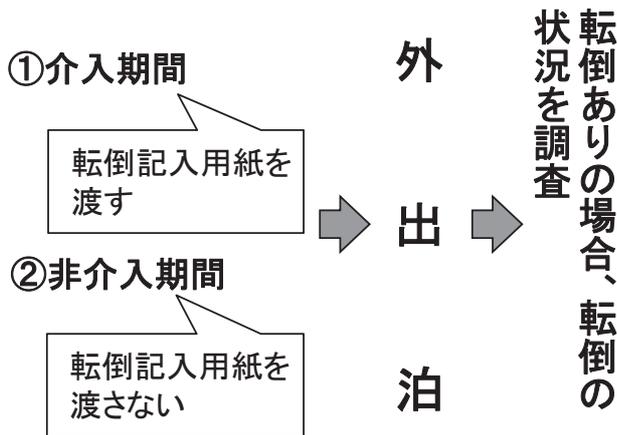


図1 外出泊時における転倒実態調査の介入方法

介入期間は転倒記入用紙を渡してから外出泊に行ってもらい、非介入期間は転倒記入用紙を渡さずに外出泊に行ってもらった。介入・非介入期間ともに帰院時に転倒していたかどうかを尋ね、転倒ありの場合は介入期間同様に転倒の状況を詳細に調査した。

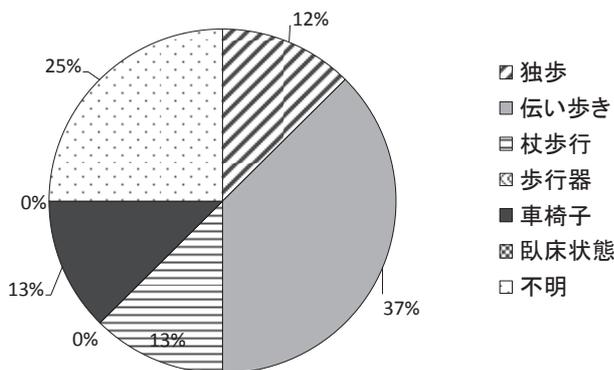


図3 外出泊時における転倒実態調査における転倒した患者の移動能力

介助歩行レベル（伝い歩き・杖歩行・歩行器）の患者が5割を占めていた。

けになったと考えられる。結果としては記入用紙自体に転倒予防の役割を果たす可能性が示唆されたと考えられる。

外泊時転倒患者の屋内の移動能力は伝い歩き・杖歩行・歩行器など介助歩行レベルの患者が5割と最も多かった（図3）。

尻もちやベッドからのずり落ちについて聞き取ることで、はじめて転倒が明らかになった例があり、今回の調査を通して患者・家族は患者が尻もちやずり落ちを転倒・転落と捉えていないことがあった。とくに頻繁に転倒を繰り返している場合は、外傷を受けていない転倒を問題と捉えていない可能性がある。以上の点より、患者・家族と医療従事者の間で

一カ月あたりの転倒患者数

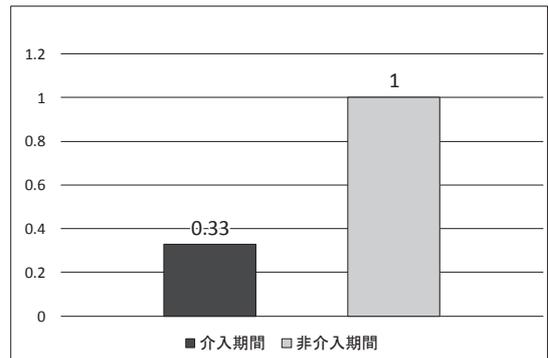


図2 外出泊時における転倒実態調査における1カ月あたりの転倒件数

転倒記入用紙を渡した介入期間では1カ月あたりの転倒患者数は0.33名であったが、渡さなかった非介入期間では1名であり、介入期間の方が転倒が少ない傾向であった。

転倒・転落の定義についての相違があり、在宅での転倒・転落が潜在化している原因のひとつであると考えられる。どのような状況を転倒・転落と定義するのか説明し、患者・家族と医療従事者の転倒についての双方の認識を一致させる必要があると考えられる。須藤は『高齢者の患者さんは日常生活動作の自立度が低くなっても自分でトイレに行きたいからと行動する方が少なくはない。認知・理解力や筋力低下などをともなう高齢患者は異なる環境に順応するのが難しい』³⁾と述べている。退院時の指導だけではなく、療養環境から生活の場に一時的に戻る外出泊だからこそ、その患者にとってとくに注意して欲しいことなどの、転倒予防についての患者・家族指導がより必要になると考えた。

2. 転倒予防川柳を用いた外出泊時の転倒予防介入

退院時には時間をとって退院指導の一環として転倒予防についても指導を行っていたが、外出泊時には十分な転倒予防への介入ができていなかった。そこで外出泊前に当院で患者・家族・医療スタッフから募集した転倒予防川柳（平成23年65句、平成24年121句、平成25年186句）より外出泊時の転倒予防に適切と思われる川柳カードを渡し、転倒予防に効果があるかどうかを検討した。

(1) 対象：旧北1病棟に入院中で外出泊した患者9名と旧北1病棟勤務の看護師23名

(2) データ収集期間

平成25年10-11月の2カ月間

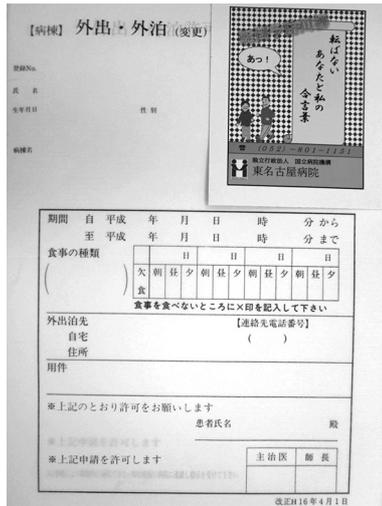


図4 転倒予防川柳を貼付した外出泊届

看護師が患者に気を付けてもらいたい内容の川柳を選択し、外出泊届に貼付した上、外泊に行ってもらった。

外出泊の届け出に転倒予防川柳カードを貼付し(図4)、帰院時に外出泊中に転倒が発生したか聞き取り調査を実施した。転倒が発生した場合はどのようにして転んだのか、外傷の有無、時間帯、場所、付き添いの有無、外出泊時の看護師の関わりによって転倒しないよう意識できたかについて、患者・家族より聞き取り調査を行った。看護師には期間終了後に転倒予防に関われたかどうかなどのアンケートを行った。

外出泊した患者は9名。外出泊件数は50件。10月は20件3名、11月は30件6名であった。調査期間中に転倒した患者は0名であった。

2カ月間で外出泊中に転倒が1件も発生しなかった理由のひとつには、先行研究でもあったとおり、転倒予防調査用紙を渡すこと自体に転倒防止を意識付ける効果があったことに加え、さらに転倒予防川柳を貼ることで外泊時の転倒の発生はみられなかったと思われる。尾鍋は「刺激としての情報が入ると初めに感覚受容器に入り、次に短期記憶貯蔵庫あるいは長期記憶貯蔵庫に入る。入った情報を知識として定着させるためには長期貯蔵庫に入れなければならない。紙メディアは人間が引き継いできた記憶を集積させるための媒体であり、情報は紙に載せることで信頼性が高まる」(http://www.jagat.or.jp/past_archives/content/view/1153.html) というように外出泊届だけでは事務的作業で印象に残りにく

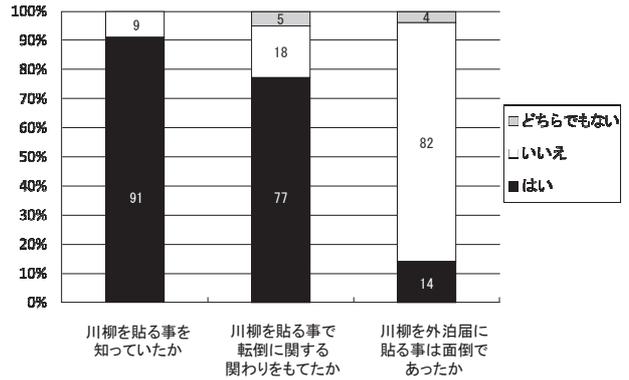


図5 転倒予防川柳を用いた外出泊後行った、看護師へのアンケートの結果

転倒予防川柳を外泊届に貼ることを知っていた人が過半数であるため調査内容を周知できており、また患者に注意してもらいたい内容の川柳を選択し外出泊届に貼付するという行為により、8割弱の看護師が転倒に関心をもつことができていた。面倒でなかったと感じた人が8割以上で業務に支障をきたすことなく取り組めたと思われる。

いが、転倒予防川柳を貼付することで転倒しないように気を付けなければいけないという意識付けがされたと考えられる。病棟では転倒を繰り返し、危険行動があって離床センサーや床センサー、安全ベルトを装着している患者も外泊中に転倒の発生はなかった。亀井は「在宅高齢者の1年間の転倒者割合は男性25.1%、女性27.2%で、うち45.3%は家屋内で転倒している。自宅内での転倒予防教育の必要性は高く、本人の行動変容を促す転倒予防教育方法を開発することが重要である」⁴⁾と述べている。外出泊中は家族がマンツーマンで患者に対応でき、病棟のように大勢の患者のケアをしながらの観察ではないにしろ、家具や日常生活に使用する小物、コード類が多くあり、転倒しやすく受傷しやすい環境も多くあり、患者・家族も安全に過ごすために多少の意識改革が必要である。

もうひとつの理由として、数人の患者が外出泊を繰り返していたので何回も川柳カードを渡すことになり、転倒しないようにという意識付けが繰り返されたということが考えられる。

また、看護師に転倒予防川柳を外泊届に貼付後のアンケート結果(図5)は、①転倒予防川柳を貼ることを知っていたかでは、「知っていた」が91%、「知らなかった」が9%。②転倒予防川柳カードを貼ることで転倒に関する関わりがもてたかでは、「もてた」が77%、「もてなかった」が18%、「どちらで

もない」が5%。③転倒予防川柳を外出泊時に貼ることは面倒であったかでは、「面倒ではなかった」が82%、「面倒だった」が14%、「どちらでもない」が4%であった。看護師への転倒予防川柳についてのアンケート結果では、調査内容を理解し関わる事ができていた。患者に気を付けてもらいたい内容の転倒予防川柳を選択し届け出に貼付して外出泊時に渡し、転倒に気を付けるように声掛けをして送り出す事ができた。面倒でなかったと感じた人が8割以上で業務に支障をきたすことなく取り組めたと思われる。経験年数や年代に関係なくすべての看護師が同じレベルで行える簡単な取り組みであり、統一できたこともよい方法であったと考える。また、外出泊時に転倒しないという明解な目標は互いに理解しやすく、自ら患者のために選択した川柳がそのきっかけになり転倒予防の意識向上にも繋がったと思われる。

今後も転倒予防川柳などをさまざまな形で活用し、転倒予防に努めケアの実践を報告していきたい。

◆ 終わりに

これらの研究により、転倒記入用紙を渡すという行為自体が、患者・家族への意識付けとなり転倒予防の役割をする可能性が示唆された。また、外出泊時に転倒予防をする必要性を再認識したため、転倒

予防川柳を用いた外出泊時の転倒予防の介入を行った。外出泊届に転倒予防川柳を貼付することで、患者・家族に転倒予防への参加を促す⁵⁾とともに、転倒予防川柳を選択し渡すという行為が看護師個人の転倒予防活動に影響を与えることが明らかになった。

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。

[文献]

- 1) 饗場郁子, 城所智子, 村井敦子ほか. 自作川柳による転倒予防啓発活動-川柳で 転倒予防の 策つたえ!-. 図説「転倒予防」シリーズ 医療 2015; 69: 448-53
- 2) 真鍋淳, 関根七巳江, 大関浩之ほか. 多職種協働で取り組んだ患者向けDVD制作の成果と意義. 看護 2010; 62: 41-45
- 3) 須藤邦子. 転倒・転落予防ワーキンググループがさまざまな取り組みを継続. 医療安全 2010; 26: 62-64
- 4) 亀井智子. 在宅高齢者の転倒予防を目的とした Home Hazard Modification Program の開発とその有効性の検討. 第9回転倒予防医学研究会 2012; 10: 36
- 5) 饗場郁子. 患者・家族参加型転倒予防対策. 図説「転倒予防」シリーズ 医療 2015; 69: 38-41